

# 『いわずもがな…』

新潟大学名誉教授 染 矢 源 治

タイトルの『いわずもがな…』は医歯大第1口腔外科の上野 正教授の退官記念に頂いたエッセイ集の題名であったと思う。

今から47年前、歯科麻酔の大学院に進み一年間、毎週木曜日の担当は口唇裂の一次形成術を受ける生後3ヶ月前後の乳児の全身麻酔ばかりで、術者は泣くも黙る上野教授。無言ですれば一時間前後で終わる手術だが、麻酔や手術のこと、研究や医療のこと、真空管アンプなどの四方山の蕩蓄話にうっかり乗ると、手を休めるため二時間近くに及ぶことも多々あった。一分一秒でも早く終わることを念じている新米ホヤホヤの麻酔医にとって、教授の術中話は軽く相槌を打つだけで内容はほとんど記憶に残らなかった。文頭のエッセイ集を読んでも、手術中の話しなどを中心にした内容で、題名とはうらはらに、手術中ですら若造を懇々と諭していたのだと思う。日本初の歯科麻酔学講座を作って斯学の道を開き、更なる発展を進めようと、まだ心意気が盛んな頃の上野先生で、豊富な教養と知識を備え、専門を超えて教わることは極めて多かった。上野教授とは比ぶべくもなく浅学非才な上、晴耕雨読の合間に山奥に入り溪流釣り三昧の身では、日頃考えていることは多々あるが、若い優秀な研究者に敢えて敷衍し、直接支援できるものはない。

さて、国は、1991年に新たな科学技術立国を担う人材の育成を謳い大学院重点化、1995年には科学技術基本法を作り国立大学を法人化してこれに拍車をかけようとした。これにより、大学院生は現在2倍以上に増えたが、大学、研究所や企業の博士の採用者数は増えていないため多くは博士浪人となり、ポストをめぐる一部醜いとも思える競争が生じている。また職に就いても任期制や成果主義のため業績を短期に挙げなければならず、高度先進医療、研究、科研費関連の過誤、大企業で

の不正会計、食品偽装、自動車の燃費不正など様々な分野で問題を起こしている。大学、研究所、一般企業での短期の成果主義一辺倒によると考えられる問題はすでに社会問題の域を超えて国家レベルの信用危機にあると思える。さらに東大を始めとする極少数の大学や理研など一部の研究機関へ使い切れない巨額の税金を恣意的につぎ込み、序列化し、これにより10年後にノーベル賞受賞者を10人以上出すとする文部官僚の目論みが仮に達成されたとして、それが果たして本当に意味のあることだろうか？

さておき、変革の時代を乗り越え、本学部が開設50年を迎えたことは誠に喜ばしい。とりわけ優れた教員、研究機材の充実、そして大学院や付属病院の発展、隆盛には目を見張るものがある。新病院を受診する度に誇らしく、誠に嬉しく思う反面、開設以来今日まで多くの人々の血と汗と涙の賜でもあり頭が下がる。また50年の歳月の間に、本学部関連の研究者、医療人は俊髦の一世から俊英の二世へと確実に移り、隔世の感を禁じ得ない。現在、上場企業でもCEOや社長の平均年齢は60歳であり、蛇足だが人命を左右する歯科医や医師も70歳位の定年制が必要であろう。老翁は静かに社会を見守るだけで良いと思う。

振り返れば、様々なことが走馬灯の様に脳裏を巡る。時の流れは早く、まさに「邯鄲の夢のまた夢」である。だからこそ、ゆっくり、じっくり考えるゆとりを持ちつつ、怠らず着実に研究することも肝要と思うのは、老輩の妄言、否若者への「いわずもがな…」であろう。

現代は多くの分野で先行きを確実に読めない混沌とした状態にある。創立50周年を契機に、若き叡智を結集し、さらに同窓をも含め丸となって発展の礎を強固にし、本学部が歯学のために一層発展することを心底願ってやまない。